

Möglichkeit der Gruppenarbeit im DaF-Unterricht für Anfänger

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 犬丸, のり子, INUMARU, Noriko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/5407

第二外国語としてのドイツ語教育におけるグループ学習の可能性

犬丸 のり子*

ドイツ語教室

(平成10年10月26日受理)

Möglichkeit der Gruppenarbeit im DaF-Unterricht für Anfänger

Noriko INUMARU

Seminar für Deutsch

Zusammenfassung: An japanischen Hochschulen wird Deutschunterricht als zweite Fremdsprache durchgeführt und es wird meistens immer noch die traditionelle Methode verwendet: die Kombination von Grammatik und Texte-Lektüre. Seit Jahren haben aber viele Deutschlehrer und -lehrerinnen die Wichtigkeit kommunikativer Methoden anerkannt und versuchen, diese in ihren Unterricht einzusetzen. In Japan befinden sich jedoch kommunikative Methoden für Deutschunterricht noch auf dem Weg der Entwicklung. Seit dem Sommersemester 1998 probiere ich eine Methode, bei der die Lernenden hauptsächlich durch Gruppenarbeit (aus vier Personen) Fremdsprachenkenntnisse und Kommunikationsfähigkeit zu erzielen versuchen. Durch die viermonatige Beobachtung habe ich u.a. folgende Vorteile der Gruppenarbeit festgestellt: 1) In der kommunikativen Atmosphäre werden die Anfänger-Lerner leicht dazu gebracht, spontan auf deutsch zu sprechen. 2) Man kann dadurch Lernstrategien für "autonomes Lernen" kennenlernen. 3) Motivation und Selbstverantwortung der Lernenden werden auch gefördert. "Gruppenarbeit" ist zwar ein schon gewöhnlicher Übungsstil, hat aber für kommunikativen Unterricht noch viele Entwicklungsmöglichkeiten in sich. Ich möchte weiterhin diesen Versuch fortsetzen und Kenntnissen und Erfahrungen über kommunikative Methoden sammeln.

Schlüsselwörter: Gruppenarbeit, DaF-Unterricht, Anfänger, Zweite Fremdsprache

1 はじめに

大学や高等専門学校での第二外国語の授業は、一般教育科目、教養的科目といった枠組みで、従来、「文法」と「講読」を中心に行なわれてきた。しかし、1980年代後半から、中学・高校の英語教育において、AET (Assistant English Teacher) の増員、「オーラル・コミュニケーション」科目の導入などコミュニケーション能力育成を目指したカリキュラムが進められたことと平行して、大学での外国語教育でも、コミュニケーション・アプローチや異文化アプロー

* 福井医科大学非常勤講師

チによる授業の重要性が唱えられはじめ、教育機関によって違いはあるものの、第二外国語科目を「文法」と「会話」の組み合わせや、「文法」は必修、「会話」か「講読」を選択必修という形で履修するなど、対応に変化が見られるようになった。

しかしながら、いざ、会話の授業に取り組もうとしても、日本のドイツ語教育では、そのメソッドが未だ確立しているとは言い難く、教師がそれぞれ困難を覚えつつ試行錯誤を続けているのが現状なのではないだろうか。本稿では、第二外国語科目としてのドイツ語の授業におけるさまざまな制約を考慮しつつ、ひとつの有効な学習形態としてグループ学習の可能性を検討し、自らの試みに即して、今後の課題を考えてみたい。

2 第二外国語の授業をめぐる環境

専攻によっては、第二外国語そのものの必要性を問う声も上がっている今日、いろいろな角度から新しい言語に接する機会が増えるのは、外国語教育にとって重要なことである。しかし、これまでの「教養」としての第二外国語では、「話す・聞く」能力よりも「読む・書く」能力の育成に重点がおかれていたことや、教師数、教室、カリキュラムに制約があることから、個々の教育現場を見ると、コミュニケーションなアプローチによる授業に対する環境が十分に整っていないケースがまだ多いように思われる。

制約のひとつとしてまず挙げられるのは、多人数のクラス編成である。カルチャーセンターなど民間の語学教室では、5～10人、多くても15人程度の少人数制がほとんどなのに対して、大学では1クラス40～50人が普通で⁽¹⁾、時には60、70人を大教室に詰め込んでいる場合もある。このような環境で、声を出して練習するといった授業を進めるのは不可能に近いのだが、大学の多くは、教室の大きさ、数などハード面の条件や教師数の限界から、多人数制を採らざるを得ないようである。

また、少人数制の導入が難しいことに加え、机と椅子が床固定式で、配置を自由に変えられない教室が多いのも、コミュニケーションな授業を進める際には大きな制約となる。固定式の座席では隣同士でのペアワークは可能だが、教室内の移動が困難で、教師－学生のやり取りが中心になりやすい。他に一体型の机と椅子を置いた教室もあるが、スケッチを実際に演じる、立ててゲームをするなどの会話練習をするには十分な空間を確保しにくいという難点がある。

変更の可能性が低いもう一つの要素は、授業時間である。1科目につき週1回90分、1学期(半年)15回という時間割が平均的なもので、第二外国語では通常2科目を前・後期とも履修し、うち1科目は「文法」が必修の場合が多い。コミュニケーション能力の効果的な育成には、週2回は「会話」に相当する授業があることが望ましいが、大学によっては外国語科目のコマ数を減らす動きもあるようで、授業数の増加はあまり期待できないと思われる。

さて、これまで第二外国語の授業における外的な制約を見てきたが、英語以外の言語を初歩から学習する、学生側の環境はどうだろうか。学生のモチベーションが低いと嘆く教師の

第二外国語としてのドイツ語教育におけるグループ学習の可能性

声をしばしば耳にするが、積極性に乏しい学生は、中・高6年間の英語学習経験を引きずっていることが多いのではないか。ドイツ語の場合、同じゲルマン語族で英語に近く、ラテン、スラブ系の言語よりも楽だろうと見込む学生もいるが、中・高6年間の英語教育に対しては、文法、長文読解中心で会話やヒアリングが少ないといった不満があり、新しい言語をどのように「習う」のか、期待する一方、不安も感じているようだ。

筆者は本年度、大学で「初級ドイツ語会話」（科目としては「文法以外」の枠組みに入る）2クラスの授業を担当するにあたって、両クラス88人を対象に、第1回目の授業で簡単なアンケートを行なった。（学生の専攻は、法学、経済、文学、理学、工学、医学、教育などほとんどすべての学部に及んでいる。）質問のうち、第二外国語にドイツ語を選んだ理由では、50%（44人）が「ドイツ語圏の国やドイツ語に対する興味」を挙げ、約60%（52人）は「将来、何かの役に立つから」、約35%（31人）は「英語に近く学びやすそうだから」と回答した。⁽²⁾ また、中・高6年間の英語学習についての意見、感想を自由に書いてもらったところ、32人が「会話やヒアリング練習の不足」を訴え、「読み書き中心の受験英語に対する不快感」、「暗記の退屈さ」などを含めると約65%（57人）が何らかの不満を抱いており、今までと違ったアプローチでの語学学習を望んでいることがうかがえる。

「習ってみたら自分には合わなかった」ということはあるものの、このように、少なくともスタート時点では学習者に興味や期待がある以上、そのモチベーションを高めるか低くするかは授業のスタイルに大きく依存すると思われる。会話の授業でも、文型練習や教科書の対話例文の暗記だけでは中学・高校英語の延長に過ぎない。学習者が希望する、「話せるようになる」授業のためには、机の配置や視聴覚教材の導入など、さまざまな観点から新しいアプローチを検討する必要があるのではないだろうか。

そこで、学習者がより積極的に参加し、コミュニケーション能力を習得できるような授業を、クラス・サイズなど制約がある環境のもとで実現させる可能性として、筆者はグループ学習を試みている。前置きが長くなったが、このグループ学習について以下に述べたいと思う。

3 グループ学習の必要性

グループ学習は、小・中学校ではすでに70年代から班活動の形で実践、研究が進んでおり、大学のコミュニケーション英語の授業における効果も報告されている。⁽³⁾ グループの規模については後で述べるが、3～6人が1グループを構成するのが一般的なようだ。グループ学習には幾つも長所があるが、次の4点が特に重要と思われる。

- a ペアワークよりも、より現実に近い形の状況設定が可能である。
- b 伝えたいことを自分の力で表現しようという、自発的な学習態度が促進される。
- c 身近なテーマや学習者の関心に即したテーマを選んで発話練習をすることによって、言うべきことがない状態は避けられ、学習者のモチベーションが低下する危険が少な

い。

- d 相手が数人ならば、間違えを怖れる、恥ずかしがるなどの心理的プレッシャーは障害になりにくい。

これらの長所を生かす鍵を握るのは、なによりもまず、教師の役割、態度である。教師が「知識を与え」「指示する」授業になれている学習者は、グループ学習において、自ら舵を取って学習プロセスを組み立てることにとまどいを覚えるものだが、それでも教師は「教える人」になるではなく、作業に必要なストラテジーや習得した表現を応用するテクニックなどの「仲介者」に徹するべきであろう。一方、ある意味で学習者を「突き放して」、自発的な態度を促すのは、教師として「手を抜く」ことになるという批判もあるかもしれない。しかし、グループ間の進捗・スキルの差に対応しながら、1学期、1年という限られた期間である一定の習得レベルに到達するには、毎時間ごとのテーマ、組み立ての検討、軌道修正が不可欠で、それなりの量の準備が必要となる。むしろグループ学習は、語学授業に対する学習者、教師双方の意識改革によって成り立つとも言えるのではないだろうか。そして、学習者と教師が共同で作っていく授業の新しいスタイルとして、グループ学習は、これからのドイツ語教育にもひとつの可能性を示す学習形態であると、筆者は考えている。

4 グループ学習の実践

筆者は、前に紹介した「ドイツ語初級会話」の授業にグループ学習を取り入れている。まだ前期約4ヶ月を終えたところだが、何点か興味深い発見もあり、ここでは、筆者の試みを交えながら、初学者対象の授業を検討したいと思う。

・グループの規模

筆者の授業では、2つのペアを組み合わせた形として、もっぱら4人組でグループ学習を行い、うまく4人にならないときは3人組も認めた。小グループの最適人数に関しては諸説あるが、Rehorickは「4人組は公平な関係を保つのに十分小さく、問題解決のためにさまざまな意見を出し合うのに十分大きなサイズである」とするMillsの説を紹介している⁽⁴⁾。筆者はさらに、

- a ほとんど見知らぬ初学者同士では、ペアワークも2組が協力して行ったほうが、互いにわからないことを教え合えるので効率的である。
- b 5人以上ではグループが分裂する、あるいは私語が増える危険性が高い。
- c 大学生にとって、3～4人組での行動は日常生活においても自然なことで、リアリティのある状況が想定できる。

などの理由から、4人が適していると考えた。

教室では、椅子と一体型の机4つを2人ずつ向かい合うようにくっつけて着席した。1クラス10～12グループになるが、空間の大きさ、教師の移動しやすさから見て特に支障はなかった。

第二外国語としてのドイツ語教育におけるグループ学習の可能性

・グループ学習での補助教材

初学者は使える語彙や文法知識がが少ないため、自分が知っている範囲で話すことができるテーマは、挨拶、自己・家族紹介、趣味、持ち物、食べ物の好き嫌いやレストランなどでの注文くらいにとどまる。そこで、さらに「言うべきことがある」状況を想定して、表現を増やすために有効なのが、「インフォメーション・ギャップ」⁽⁵⁾ という考えに基づいたワークシートの利用である。インフォメーション・ギャップとは、ある人が他の人が知らない事柄を知っている状況を指し、このギャップを埋めることでコミュニケーションの目的が果たされていく。教科書のダイアログ練習は、相手が話す内容をすでに知っているため、声は出しても繰り返すうちに無味乾燥なものになってしまう。その点、インフォメーション・ギャップの存在するさまざまな場面をワークシート上で設定し、相手に質問することによって、足りない情報を補っていく練習では、それぞれの質問が学習者にとって意味のあるものとなり、言語が「身につく」実感を得ることができる。このようなワークシートの代表的なもののひとつが、ドイツのLangenscheidt社の『Wechselspiel』⁽⁶⁾ で、ペアワーク用に編集されたものだが、口語的な表現が多く、ドイツ語圏の日常的な習慣を知る意味でも利用価値が高い。この他、筆者独自で、4人の情報がそれぞれ異なるようなプリントを作成している。ワークシートを用いたグループ学習では、シートに載せる例文は1つにとどめ、紙を見て話すのではなく、アイ・コンタクトを忘れないように指導することも大切になる。板書もあまり詳しく書くと、学習者は黒板を見ながら話してしまうため、表現のヒントや注意するポイント程度で良いだろう。筆者の経験では、イラストや写真入りのワークシートは想像力を助け、学習者は状況をよりリアルに想定しながら練習できるようである。

・習得度の評価

学期末の成績評価も、筆者は4人組の口述試験で行なった。時間は1グループ5、6分で、組み合わせは学生の希望を尊重して予め決めておき、試験前の最後の授業で順番を指示した。ほとんどの学生が外国語の口述試験の経験がなく、不安そうな表情をしていたが、試験は最後の授業の2週間後だったため、学生の多くはグループごとに集まって練習をしたようで、おおむね良く話していた。試験に備え、グループ単位で自発的に練習をすることまでは、筆者は予想していなかったのが、これは嬉しい収穫だった。初学者にとって孤独感はやる気の低下につながりやすいが、グループ学習では連帯意識を持って助け合えるという、別の視点での長所も見えた。

今回の口述試験では、授業で扱った、自己紹介、家族の紹介、趣味・スポーツ、食べ物の好み・食習慣など10項目程度のテーマを前もってプリントして配り、当日、教師が任意のテーマを指示して、1人につき全部で3つのテーマについて話をするようにした。どのテーマが当るかわからないため、全てのテーマについて準備をすることとなり、これは良い方法だったと思っ

ている。ただ、話すテーマが複雑になり、使う表現のレベルも高くなってくると、習得度の個人差も大きくなるので、授業の進め方を含めて対応を考え直す必要があるだろう。

・学習者の反応と今後の課題

前期の口述試験の際に、順番を待つ時間を利用して、「授業の進度、難易度」「4人組でのグループ学習形態」「授業への要望」について自由に感想を書いてもらった。それによると、93.5%（回答者77人中72人）が4人組スタイルを支持し、「話す回数が多く、効果的だ」「楽しい」「友達ができる」などを理由としてあげている。残る5人のうち2人は「個人的に共同作業が得意ではない」、3人は「ペアワークの方がよい」という理由から不支持とした。4人組を支持する中にも「2人組と混ぜながらやるとよい」といった意見があるが、一方で「わからないところを教え合える」「いろいろな意見が聞ける」など、4人を強く推す声も多かった。後期は、グループの人数や組合せを変えながら、反応や効果の違いを見たいと思う。

感想、要望で目立ったのは、「ゲーム形式の練習をもっとやりたい」という意見である。前期は、数字や食べ物、飲み物の名前を使って、クラス全体でのビンゴゲームを何回か行なったが、この練習は筆者が思った以上に「受け」がよく、覚えるのに役立ったようだ。ともあれ、学習者が積極的に練習形態を提案してくれるのは歓迎すべきことなので、学期の最中でも、学習者と一緒に授業について話し合う機会を持っていきたい。

今後、試みたいのは、ヒアリングのグループ学習で、テープをクラスで一斉に聞いた後、グループごとに答えあわせをする、グループの1人1人が異なるテキストを音読し、他の3人が内容を聞き取るなどの練習が可能ではないかと考えている。また、グループの中だけでの作業が続くと、雰囲気は緊張感がなくなり、私語が増えることが懸念される。グループ対抗でのゲームや作業の結果をグループごとに発表しあうなど、めりはりをつける工夫が必要となろう。グループ学習でもうひとつ問題となるのが、発話における文法、発音、アクセントなどのチェック・訂正で、現段階では各グループを回りながら対応し、時々クラス一斉での発音練習を行なっているが、まだ十分とは言いきれない。これも今後の課題である。

5 おわりに

基礎的な知識もあまりないままに、グループ学習に取り組んでみたが、筆者自身、文法や講読の授業も担当し、そこで学習者の鈍い反応を目のあたりにしているだけに、自由に声を出し、意見を述べられる開放的な場を形成することは、より活気のある授業のために必要な努力であると思う。グループ学習が、4ヶ月という短い期間でも、学習者の心理面に働きかけて積極的な学習態度を促すのは、学生のポジティブなコメントからも察することができ、この学習形態にはまだ課題もあるものの、大きな発展の可能性があると言えるのではないかと。「授業は真面目なものであって、楽しい雰囲気は必要ではない」「ただ話せることが『教養』の目的であっ

第二外国語としてのドイツ語教育におけるグループ学習の可能性

てよいのか」といった反対意見も少なくないだろうが、しばらくこの試みを続けて経験を積みつつ、グループ学習についての考察を深めていきたい。

註

- (1) 大学英語教育学会の調査(1995年)によると、一般英語科目における1クラスの平均的学生数は40~50人で、第二外国語でも、ほぼ同様の状況と思われる。(参考:伊藤明美「英語教育におけるコミュニケーション能力の育成—スモールグループ学習の意義と実際—」『藤女子大学・藤女子短期大学紀要』第34号(第1部), 1997年, p.25, 41)
- (2) 以下の7項目から選択(複数回答可)
 - a ドイツ語圏の国やドイツ語に興味があったから。
 - b 将来、何かの役に立つかもしれないから。
 - c 先輩、家族などに勧められたから。
 - d 単位をとるのが楽そうだから。
 - e 英語に近いので学びやすそうだったから。
 - f 消去法で。(ほかの言語よりはましだったから)
 - g その他

*その他に「専攻で役に立つ」と書いたものはbに含めた。
- (3) 例えば、伊藤明美(1997)、前述
- (4) Rehorick, David Allan: Principles of Group Formation: Adaptations for Teaching in a Japanese College. 宮崎国際大学『比較文学』第3号, 1997年, p.4。
- (5) インフォメーション・ギャップについては、Johnson, K./Morrow, K.: Communication in the classroom. 1981. (邦訳:小笠原八重「コミュニケーション・アプローチと英語教育」桐原書店, 1984年, pp.57-)を参照。
- (6) Dreke, M./Lind, W.: Wechselspiel. Langenscheidt. 1986.

参考文献

註で挙げたもののほかに:

- ・ 武井隆道「日本におけるドイツ語教育の現状と展望」『ドイツ語教育1』日本独文学会ドイツ語教育部会, 1996年, pp.110~133。
- ・ 岡崎敏雄・岡崎 眸「日本語教育におけるコミュニケーション・アプローチ」凡人社, 1990年。
- ・ Bimmel, P./Rampillon, U.: Lernerautonomie und Lernstrategien.(Erprobungsfassung) Langenscheidt/Goethe-Institut. 1996.